官版

語彙

巻十二

ホ 2
4706
12

門 ホ 2
號 4706
卷 12

明治十四年五月

語彙

宇之部

文部省編輯局

門 ホ 2
號 4706
卷 12

語彙巻十二

宇部二

うゐゐけら　カリルレロ

さきもり宇奈我既利みておも
わ〜きとともかてらひ

肩ふ手をうけて互ふ親をあつまとらふ詞なり
記下宇岐由比所宇那賀新理豆万十八たゞ

うゐゐ〜

促もの體言まて長とありて事を催督もる
人をいふ孝德紀四坊置令一人○又出雲
の俗虫名糞蛆ふ

うゐゐぐもも　サシスセ

飛ふ物を挂るをいふ記上宇那賀世流多
麻能美須麻流万十三纓有領巾もてるゝ

○又車物をいそぐもをいふ孝德紀催駈馳役大和下供の人八日もらわぬ
べ〜しとて御車うゐゐ〜ともいとらるまそう〜しとらるゝとは惠慶集秋の
野の花ふ心をよせらし駒うゐ
かきぬげふふもあるらふ

うゐゐぶもも　サシスセ

駈を傾るをいふ憂ある狀なり記上宇那
加夫斯那賀那加佐麻久万十三夏麻ふ〜

鈴鑑貯かりこもの
心もちぬゝ

うみさう

うみ〜

うみたる　ハルハルハル

うみづく　カキクケク

うみて

たてこもくもり祭る
わどゝ来ゝけり

うみい

舟にこもり○又縄ゝ鸕の羽を着て驚く〜
魚を取るをも俗ゝうみをと稱す

うみむら

海の畔をいふ[万九]海界をもいふ
海原のもとゝ
頭後あり[和]項宇奈之[宇拾十三]おゝとゝひの下
ようゝゝゝ七八寸許尖矢をい出〜〜
頂垂るゝて頭を低るをいふ
[神代紀下]往海濱但傾愁吟
項衝の意ゝて點頭をいふ[源帚木]さい
侍らぬゝとゝ人を中將うみづく
田の中ゝ水を導く爲の溝をいふ[崇神紀開
池溝夫五]ゝゝゝゝをゝうゝをの道ゝいづく

うゝひの鸕鷀を操る縄をいふ[新六三]此川ゝ
さゝふけぬ〜〜うゝ人うゝい手ゝ巻き

海原の意ゝて海の廣をいふ[記上]汝命者
所知海原矣[万廿]海原のゆうけき見〜

葬ぎちるゝゝゝゝ年ハ
へゝぬべく思ゝ

うみもと

うみや

うみとく

うみね

幼き者の稱とゝ[万十六]ゝゝ
下仕なんとゝたち心ある中ゝ
うゝゝゝゝゝゝゝゝ髪のさゝ
ゝ〜[和]髫髪和名宇
ゝ

庖丁家の名目あり[厨事類記]鯉ハ云々次ゝ
打實歟引實上ゝうゝゝ[三教五枚]或盛て供之
ひゝゝゝゝ同じ[神功紀]捉新羅使者
三人納檻中以火焚而殺之
膿汁の沸をいふ古言あり
[神代紀上]膿沸蛭流

古ハ童の髪を項ゝ垂き置き長じて後結
上〜〜ゝゝゝゝ轉じて男女ゝ拘らず
ゝゝゝゝゝゝゝの童子をいふ[宇藤原君]ゝゝ
[拾遺夏]郭公をゝゝゝゝゝゝ

うみねこ　若狭俗

うみねばゝり

ね〜童女波奈理波
髪あげ〜〜んゝ

草名白頭翁ゝ
ゝゝ〜

ゝゝゝゝゝ同じく髫髪の上ゝ〜〜て打放ち
ゝをいふ[万十六]橘の寺の長屋ゝ

うに　介名其殼圓扁まるして外に黑刺密布せり其肉を取て醬とす也介を甃ふ者其刺を香箸がひとと稱す○海膽本和靈贏子和名賦役令棘甲贏六斗大嘗祭式細螺棘甲贏石花等并二十坩○又其介の肉を以て作る醬をもいふ越前福井陸奥津輕の産を最とす
○伊賀伊勢まてい石炭をもいふ

うゆう俗　獸名そろとせのみ
もあり

うふとまる俗　魚名いろくわ
もあり

うふつぶ俗　海膽の殼をいふうぶと
うふの〻ち俗　上古ふかれとのへくるに同じ〻〻
人を拆して罵る詞あり

うぬ俗　田の隴あり

うね　和畝宇祢名

うねこ俗　草名白頭翁に同じ

うねべ　次のうねめに同じ宇樓の上時もちぶめいに
さく院の御時うねべとあんに侍り

うねめ　後宮の女官にて御膳の事に預る者あり
女形容端正者後宮職員令水司云々孝德紀元采女者貢郡少領以上姊妹及子
采女六人膳司云々采女六十人

うねめのうそ　采女司の長官あり職員令采女正
一人掌檢校采女等事

うねめのつかさ　宮內省の被管にて采女を檢校せる
司なり職員令采女司

うのあしび俗　介名蛸の一種にして其形甚
鸕鷀の蹼に似たり

うのくそ　鸕鷀の糞あり藥用あり

うのはな　和蜀水華乃久曾宇
灌木高六七尺枝葉兩對す葉狹長く邊に
細齒あり四月花を開く白色五瓣穗をな
す事五六寸又十葉の者重瓣の者紅花ある者等あり○溲疏万十時
あるいはまた宇能花の五月をはじめとして久しくさくなり又十七ふぐあるこれ
さきてちりまる宇能波奈に今ぞさかりし○又重の色目にいふ物裝卯花
面白裏青四月五月着す○又俗に食類雪花菜の名あるもいふ

うのはなかり　庖丁家の名目なり庖丁聞書卯の花のり
にいりて切薄くうれにして煮あり

うのはなぐさ

四五月の雨の名とぞ。うのはなぐさ。四五月 八雲三 雨、卯の花撫子の意なり。萬葉集十に宇乃花具多思吾越之なることあるより起りて後世

うのめいろう 俗

硫黄の黄色なりて微紅を帯ひ光彩明徹なる者をいふ。石硫赤

うは

上の音轉なりとぞ。うづもうづ。類冠らいていふ 方五 まるもの。重き馬荷

表衣打といふことのごとし。永久四年百首 柏原露のあらはしさいつれば時雨のあめぞうはぞあれまさる 源澪標 うはつ瀬はうとをとせ奉らせたまふ 枕九 いとこと記きぬのうはつ瀬はうはるるを 伊 うはぐれはむさしあぶみ 拾五四 片岡のあづら柳のうはつ瀬をなかくものとこれるあらぬ

うば

ばばのうばといふ人侍りけり。老女をいふ。宇拾二 つまのうばこいうるあり。うばあて侍りしに人をもうりて云々。問へば 常磐姫物語 大和の國に外祖母同 ○又祖母をいふあるべき轉なり 隆信集 ○又土佐の俗に木名、嬰子桐をいふ

うばあのき 俗

鳥名、形あのきに同じ。但眼上に黒條あり。翅の上黒羽雑じれるをいふ

うばい 梵

在俗なれど佛道を修する女をいふ。近事女と譯す。霊異中 利苅優婆夷者河内國人也

徒然草上 比丘尼のうばうばそくさいなり。優婆夷は劣なり

うばぐら 松前 俗

草名、白頭翁に

草名、續斷に

うばごち 佐渡 俗

次條に

同じ

うばごひさう 俗

灌木名、細莖長さ三四尺葉櫛に似て冬枯もせず秋葉間に花あり。綻木の花の如く小

うばごもち 俗

まるて白色實圓く二分許紫の縦條あり。○杜莖山

うばごひ 俗

多く常陸より来る。水に浸し煮食ふ。介名、魁蛤の一種。尾嚨最細くして両唇ひくくして一片短し。其肉を乾して食る者

ういかん
まろ〳〵とそだち一寸ばかり
ひらたあげ

うづぐもり 伊勢 俗
草名、蕎麥葉貝母ゐ
ある〻

うはぎ
草名、おはぐろゐ同じ〻 万二 妻もあらじと取てうはぎつむ春の山野のへの宇波疑はなぐろゐ
けゝもゝ 又十 春日野ゐ烟立つ見やをとめ〻
春野の葱茅子つゝて煮ら〻も

うはぐち 筑後 俗
魚名、蹈水ゐ
ある〻

うはごろも 土佐 俗
草名、黄堇ゐ
ある〻

うはさだ 俗
鳥名、青鷸の一種小まゝて全體ゐ
淡赤色を帯たるものあり

うはざくら 俗
櫻中の一種まゝて樹扶ひろん櫻ゐあり
其花重瓣ゐゝて大あり落花ゐて葉あ〻

うはそぎ
箙の左方ゐ三本さゝを矢あり 大平九 上総 の
ぐ〻ゝ一はぶちそゝて寶殿ゐ納められけゝとゞ
衣を着て上ゐある處をいふ 雅裝 ときあ
けのうはぐへのはそをあ〻のらびゐつゝせて

又天正本十二 矢一つ進らせんうけて御らんぜよゝてうはぐ〻の雁股抜出〻
○又狩衣直垂あとの袖ぐり袴の紐あどゐ組又丸緒あて縫ふものゐ表
刺の意あり 雅裝 いれ〻ゝひ〻ゝのていひ〻ゝづゝものうはぎ〻あたあり

うはざめ 俗
魚名、うぞぶゐ
ある〻

うはしだ 俗
鳥名、鷸の一種杓〻ぐゐ似て大あり頭頸
の色も亦同じ〻黒く纖き紋あり
背共ゐ淡灰紫色まゝて黒斑あり翅尾
背長く黒く脛灰色あり

うはそく 梵
在俗まて佛道を修せる人をいふ漢ゐて
婆塞 益田直金鐘 於美濃 源夕負 近車男と譯せ 天武紀下 遣百濟僧法藏優
うはそくが行ふ道を

うはちこ 仙臺 俗
草名、深州夏枯草ゐ
ある〻

ういちごり 俗
鳥名、ゝゐゝことりゐ
同じ〻

うはお 俗
草名、狗舌草ゐ
ある〻

うはり

後ゐ娶もてる妻をいふ 記中 宇波那理賀
那許波佐婆 和 後妻 和名字波奈利

うむのち 俗

草名、滁州夏拈草
ゐもの〳〵

うはばと 俗

大蛇の人を傷害するものを
いふ○蟒蛇

うはばとさう 俗

草名、赤車使者
ゐもの〳〵

うはふ ハヒフヘ

強てとるをいひ又盗むをいふ 神武紀 必將奪
我國 万五 雪の色を有婆比てきけるうめの
そなりのはさうゐ〳〵ん人も
かも 字 墓 宇波不

うはふら 俗

魚名、沙魚の一種にして長さ二丈ゐ及ぶ者あり
全身灰白色皮ゐ皺ありて口ゐ歯ゐ
上邊の意ゐて表をいふ 源 帚木 うはべの
筆もえてそゑゐもとど 又 常夏 うはべいりとうゑ

うはべ

御中の昔ようさもとゐ
ひまありけるゐ

うばやう 攝津 俗

木名、櫟ゐ
ゐもの〳〵

うはもの

うはもものざこら うはものざこら

虫名、蝗蟐ゐ
ゐもの〳〵

うばむ〜 安藝 俗

鋪て寢る筵をいふ 源 若菜下 御ゐとゐ称らえ
もの〳〵 類聚雜要 表 筵三枚

うばむ〜ろ

木名、櫚の類葉拎ゐ似て濶く鋸歯あり夏
月黄色の蕚を垂る別ゐ實を結ぶ 夫 廿九 冬

うばめのき

くもゐ霜をいただく〳〵うそあのき
老のもゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ん

うばめぐ〜 俗 うばめじん 俗

木名、うそめの木ゐ
ゐもの〳〵

うはも

衣毛乃須曽奴禮 女房衣色 ゐ人
男い袴の上ゐ着女いらら衣の上
ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ら上裳の事あり

裳の上ゐ着る裙あり 四時祭式 表裙一腰
表裏別帛三丈腰料一丈 催馬樂我門 宇波毛乃須曽奴禮之
ゐ〳〵ゐ〳〵ゐ〳〵ら上裳の事あり

うばゆり 俗

草名、蕎麥葉貝母ゐ
ゐもの〳〵

袴の上ゐ着せ〳〵裳の如き服あり
和 禮 見本朝 宇波美 ○又中國の俗ゐ鳥名海鷗を云
并ゐ木名ゐ如ざら〳〵
ゐ同〳〵

うばら

光あるくして鋸歯あり四月白花を開く五瓣すくして五六分小葉の者ハ葉厚くして光る花やゝ大すくして數少くして實を營實といふ○薔薇○又刺ある小木の總名ふのふ 万十六 枳の棘原苅そけ倉立てん 灌木名高五六尺枝ハ刺多くして大葉小葉の二種あり大葉の者ハ薔薇の葉ハ似て小く 唐鞍を用ゐる時の馬銜あり

和 蒺藜銜 宇波良都和

いばらのとうとハ同じ

和 後夫 宇波予

祝の意あり 古今物名 我いけさうひまぞ見つる花の色をあらそあるるのといあべかりけり

うばらごろも

ういと

うひ

新六二 あらたまの空めづらしき春とのひてうひかうぞふる月る来ふけり

源 初音 いとけなきうひ事習ふ人もあめるを 宇 祭の使 夏たちうひたちもありやとぞすゆる歸らぬ年もあらしる

うひくしき 訓引訓

夫 廿六 たかちをふうぐ駒とうあらしてうひくしくものつる旅うな

車ハうれぬさまをといふ 源 末摘花 かくばかりいつ給ふさまのとうひくしげなり

うひだつ 訓ナツ訓デ

夫 二 いつくもかもうひたちふけるる霞うあまくいとけなき春のたちめハ

うびくひのむま

うひやうゑふ 音

うひやうゑのこと 音 右兵衛府の長官あり後世右の音を去てひやうゑのことのとよむ習ひあり○右兵衛督次條ハ同じ

うぶだ 俗

うぶぎぬ

出産くして小児ハ衣をる服をといふ 大鏡一 げらふあれどもとゆこわくとといふ事も侍るめとと給へてうぶぎぬハ給産衣 えべくける 東十六 尼御臺所給産衣

うぶげ

出産くして小児の毛髪をいふ 運歩 産毛 ゲウブ

うぶすな

生まれる本土をいふ 推古紀 葛城縣者元臣之本居也 四李物語 賤の女るあげハ

うひだつ たちはくむるをいふ 曾丹集 時鳥うひだつ山とさとあくぞ木のまを行てきくべき物を

額の白き馬あり

和 戴星馬 和名字比太 非能無麻

右兵衛府 ウヘノツワモノ

職員令 左兵衛府 右兵衛府准之

うぶすなのかみとうまろう○後世轉じて生まれる土地の神をいふ
塵添壒嚢抄十三 うぶすなのと云ハ何事ぞ當時ハ所生の所の神をいふ歟或ハ
本居と書き或ハ
産土と書き

うぶめ

えらめる婦をいふ
和 孕婦 和名抄不女

うぶや

神代紀下 爲我作産屋相待矣
誕生の祝儀あり三夜五夜七夜五十日百日
各其式あり 源葵 みこうんもめ殘りなき

うぶやゝまひ

うぶやゝまひとものめづらかなる
吉事談 朱雀院御誕生五夜産養之時
上をのゝ又表をいふ 万三 まめろがの神う
まはぐ天雲の雷の上ハいわりせるかも 又七
紅の深染の衣下ハ着て上ハ取着ずことなきんかも 和 表 開宇 ○又轉じてある
ず上まど己ハ然るを又更ハ其上ハの意ハも用ゐるあり 万五 老ゆてある
我ず身の上ハ病をら加へてあまぐ 又十九 あゝ ひきの山下日うげらける
宇倍まやさらハ梅をまぬぐん ○又ひとりうへ人のうへおど身上をいふ 万十三
まひをくの今つくる道さやけゝるかも 妹於事矣 又二十 むゝ
どりの朝立いそゝ 伊美我宇倍いきやうふきらつ思ひゝ如く 金葉冬 年ゝれぬ

ゝとをろうこそいふうゝ ゝこひがをう
うゝも御涙の隙ゝ流るゝ ゝまをを ○又凡て貴人をいふ又貴人の室をいふ
源 玉鬘 いゝくゝようまゝり給へるそうゝまをとのとおどろくしく
ゝく 榮 歌合 内大臣殿ハ此院の御のもうゝの女二の宮をそうゝそゝ ゝまを
○又宴居をいふ 源 桐壺 うゝふうゝ
○又漁猟の具細き竹まて編をべゝくゝと出べゝくゝさる様ハ作まる物を
いふ 和 笠 和名 宇倍 捕魚
竹筍也

うべ

宇倍こひふけり 菅万上 うゝひをの郁子もあゝらん花ざゝゝさゝゝとう
まふうちうふけり ○又草名野木瓜ハ同じ 本和 郁李 一名爵李 和名 倍
實ハ然もあるべきをいふ

うべゝゝき

シクシキ
篤實ハ然るをいふ 枕八 うゝ
所のせんさいうへよう

草名、括攣ハ
ゝゝ

うべうり

山城俗

うべなふ

ハヒカヘ
肯ふをいふ ○諾 神代紀下 其所不服者
唯星神香々背雄耳

うへのもの　上條に同じ　宇倍奈弥由流反　續紀三十天地乃

袍といふ裘の衣の義なり闕腋縫腋の別あり　和　袍　沼和名宇倍乃岐一云朝服　着襴之袷衣也今音廿三

うへのきぬ

本着たりつる表の衣指貫に雅裝下　うへのきぬのあつかたるふつうなり

うへのはかま

可同色不得交紅茜色　雅裝下　うへのはかまのかんさちめのきうそくのたものなりこもんこれをさうぞくらいの濃し　大口も云々　袍大口袴表袴中隔上下　東帯の時表に着る袴をいふ　西宮臨時表袴古時無堅文近代多用之云々

のべくるこしもあり　和　大口袴　云々一云表袴

うへびと

くもゐの事やうへ人をとのもの殿上人　宇嵯峨院　きさのたまうへとのもの　つぼ大殿うへ人あり　そそうたまひぬ　拾五

うへぶ

うへぶとの明のはるもあり　平家三院の御所法住寺殿にうへぶ　禁中に夜直をするをいふ内裏に卧の義あり　辨内侍集九重の雲のうへ　袖さえてはる

うへらわらは

とうしき　宇拾三　その家のうへらわらはを　源雅本　御供にさぶらふうへらわらはの　殿上にて使もろ〳〵童又貴人の身近く使ふ童をいふ

うやく　下野日光俗　木名山茶科に同じ

うやぜ　俗　魚名のおがたひに同じ

うやぜだひ　俗　魚名狀もめだひに類し又うやぜに似うり身に竪條ありて濃淡交り口細く背に光あり大き一尺許尾及び鰭にもうもふ等し　○石鄭

うま

獸名高さ四尺の餘を以て寸を稱せ長面なり髭あり四蹄圓く底平なり中窪めり尾長き身の高さに等し　其齒上下各六人其齒を見て老少を驗す毛色百般すべて各其稱あり各條に注せ　神代紀上其神之項化爲牛馬　雄略紀宇麼能耶都擬播烏恐誓矩謀那斯　類名馬ウマ　方言思ふこころ心やすんじ宇麼ゑめて　○又十二支の午をいふ午の三十六禽中の馬なり　故ふるく拾遺物名　うまひつじ　うるとりのぬ　千載詼諧　けふもまるうまのうしとたふきん　あまひつじのあめをちうるきぬ　うんうん　○又双六の

塞をとりふ 枕七 つもぐ〜ある物馬あり〇又物の味の美なる
為る車の巧あるをとりふ 崇神紀 宇磨佐開添和能等能々 万十六 味飯
と水ふかくるすゝこぐまち〜かそりはそあもたくうゝ〜あゝ〜〇又
貴きをとりふ 方五 あさうをるあもつのことをと人をりくゝ見るふ志〜
えぬらゆをゝ
の子と

うまうど 俗

草名獨活ふ
同ト

うまうゝ

板立馬の類あり いたゝをとりゆの條併せ見
つゝ〜 續紀廿九 其大神宮及月次社者加之

以馬形并鞍 陰陽式 紙七百五十張 作鞍形二万五十文調形二百五十足馬形五十足料
〇又俗ふ馬を牽をのをとりふ

うまうひ

馬を養ありうふ者をのふ 雄略紀 時以新羅
人為典馬 典馬此云于麻柯毗 今昔廿三 馬い廊の妻の且ある
所ふ引入をて馬
うひの男居う

うまき 列刊切

味の美事の巧あるをとりふ 武烈紀 食
美而忘天下之飢 欽明紀 新羅世言 万十六
うゝひうくと味もあくゝをあをみどもやをくゝもあ〜ゝを 字 譚字万志
今昔廿八 此様の美物欲〜く侍るあり

うまきゝ

ふ白花を開く小ゝ〜て菊の如〜茎を摘めば
黒色の汁出づ 本和 鱧腸 和名字未岐多之

うまらを

馬醫あり 塵添壒嚢抄十 馬藥師を
伯樂とりふ何ぞ

うまらん

馬ふ牽せて田地を耕を具あり其狀櫛の
如〜 和 馬把 字源 散木下 田笠ををたけふ
通ふあきをあをを牛ふらゆをゝ
うゆたくをもあ〜

うまご

子の子をのふ 靈異中 孫 古万 源未摘花 もをあ
ふやうまごふやも〜たある大きの女の
人をとり〜あひたてまつりまご 廿三

うまさゝ

草名鶏冠花の一種高さ二三尺すて葉細長
多くの枝あり夏末梢ごとふ穂を出を形
圓細長三五寸花筆頭の如く白〜又淡紅
淡黄等あり 本和 青葙 和名阿末佐久

うまざゝり

道塗泥濘の中ふある馬跡の干きたるを
りふ 夫廿七 数あゝぬ身ふあ〜をたるらゆ

うまきゝ

草名春末生を苗高さ二三尺葉旋覆ふ似
て厚澀毛あり枝葉両對を夏月枝梢こと
の如〜茎を摘めば 和名字未多之

ぶらりさのうあるあ〜
あうとうるむうん

うまぜり

あうるうのまうと詳あうるとを本草和名ふ
舉たる外考ふべきものあり〜

うまぞひ

まぞまつくきせたまふ 枕七 馬そひの
あたうしたるたうり〜と

うまたて 俗

うまつるのき

草名圓莖高一二尺葉互生也三葉一蒂ふ
〜て蛇含の如く〜ともあり六月枝梢ふ
花を開く五瓣黄色蛇苺ふ似
本和 列子一名狼牙 和名抄末 都加奈岐

うまふ

うまぬすびと 俗

草名當歸ふ同ト 本和 當歸 和名抄末世利 也末世利
○又草名 本和 馬芹子 和名抄末世利 此草今の何
ふ

乘馬ふ副ひて行く従者あり 源若菜下 馬そ
ひ随身〜〜繰り〜〜 榮 初花 御うまぞひ

うまをつあぎあ〜
所をいふ

馬寮の長官あり左馬右馬の両寮併ふあり
職員令 左馬寮右馬寮准此頭一人掌左隼
人掌乘馬鞍具之属 東宮職員令 主馬署

馬の身體ふいふ名目あり
和 食槽 和名抄末 伊波布

介名大小等〜〜〜〜大抵長さ一寸許中
央の闊さ六七分両頭微狹〜〜て圓あり其
質光滑〜〜と厚〜〜左右両邊より卷て内ふ向て長竅開き左右皆齒刻
あり白色又斑文ある者等數百品あり○貝子 和 紫貝 和名抄末 保加比

左右馬寮をいふうまのかとの下併せ見る
べし 職員令集解五 左馬寮 左馬寮 右馬寮准之

草名大麥ふ
あるべし

草名防己ふ
同ト

騎兵をいふ 天武紀下 其有馬者
爲騎士

うまのかと

馬調習養飼供御乘具配給穀草及飼部戸口名籍事○右馬寮の頭をも
いふ右馬の音あり 大平 こくふ細川右馬の頭頼之其比西國の成敗を司と
りて○又皇太子の馬を掌る者をもいふ 東宮職員令 主馬署
首一人掌乘馬鞍具之属

うまのきわ 孫

馬の身體ふいふ名目あり
和 食槽 和名抄末 伊波布

うまのこやぐひ

うまのつるぎ

うまのたてがれ 俗

うまのめ 俗

うまのりびと

草名防己ふ
同ト

騎兵をいふ 天武紀下 其有馬者
爲騎士

うまのり

車を學び得て巧なる人をもいふ
此用意を忘れざるを馬乘しと申馬乘の申侍しに云々

うまば

のひとりのひ 源葵 馬場のあしてのかとも
たとへばひと上達部の車とも多くて

うまはらへ

馬を洗ふ刷あり

うまはる 刷 和馬刷 于麻波 太氣

殖廣ごるといふ 允恭紀 一氏蕃息更
爲萬姓 雄略紀 恐更蔓生請遂除之

うまびも

草名夏初生は莖赤く地に揺は葉倒蛍
形にして面對は長五七分厚くして光あり
葉間に二分許の黄色十瓣の花を開き子を結ぶ○馬蔬草 和 馬蔬 物氏漢語抄云
馬蔬草 宇 万比由 散木 下 とも稱りしこの下にのぞめる馬ひめを引捨さるにぬ〜ぬのうべき

うまふ 八ヒフヘ

殖はをいふ 万十六 寺々の女餓鬼まとさ〜
大きなるのをうたたもりて其子孫繁

うまふ糞

馬に飼ふ槽あり 記 下 入於馬槽與土等埋
靖 下 うまふ糞もあり〜と聞えさせ給へ

うまふぐき

草名牛蒡 和 惡實 和名抄太波須 又宇知不々岐須

うまや

爲往還路驛 大和 まつのづるのうまやのをとこ
しるけり 源須磨 うまやのをとこ
旅路に設置て馬をつぎたる處をいふ 又
轉じて旅店なる所の名なるべし 神功紀
養ふ〜處をいふ 万十三 赤駒の厩を立て黒駒の厩を立て〜 釋紀十九 厩戸
皇子 數 馳 馳 ウマヤト 德 ○又人を禁め置所をいふ 後拾雜五 前伊勢守義孝守
治大政大臣のうまやにまうでたり
〜と聞て

うまやをと

はひのうまに馬弓
つくりまつる

うまら

のくの宇萬良のうれにはもあり
かくふる君をそうれらやん

うまるる 和 和

子の誕をいふ 記 上 是以一日必千人死一日
必千五百人生也 万十二 これをのち所生人い

ほぶ如く戀ちるちらふ
あひこまるあめ

うを

古い湖海等凡て水の多き所の名ことに中古ようい内海大洋凡て醎水の所の名とす

ぢつり 記上 都不得一魚亦其鉤失海 又中 述本抒理能
阿布美能字美途 和 海 字美

うを

濃汁ふ同〜○又倦并
湖
績の體言

うをいも 尾張 俗

水中生物の名紫梢花ふ
ある〜

うをう 俗

鳥名あ孫ことりふ
ある〜

うをうさだ 俗 うをうし 俗

海産生物おめふしふ
ある〜

うをうあだ 筑前 俗

魚名あるごふ
同〜

うをうま 俗

海産の小魚ふて頭馬の如く全身甲狀の皮あり腰より以下四稜ふて節あり末尖りて尾鰭ふ〜長一二寸或三四寸色褐ふて或い銀色黑色あり乾ける時い尾を内ふ卷く○海馬

うをを七 俗

海獸名あ〜ふ
ある〜

うをを

うを海あり〜ごい處の意あり 記中 字美
賀由氣婆許斯那豆牟

うをごつま

孕婦の臨月をいふ 榮 浦々の うをごが
つまるもの給ひて

うをごふ 俗

蟹屬蟻ふ
同〜

うをごん 俗

鳥名まひごごんふ
ある〜

うをごうぎ 肥後 俗

植虫名越王餘箭ふ
同〜

うをこむろ 俗

海獸名海獺ふ
同〜

うをごめ 俗 ちやうがくばう

海中ふ産ける大龜あり長さ二三尺四足皆鰭ふて爪あり前足い長く後足い短し
甲の色黑色或い黃色の斑點あるものあり肉を食用とす
又腹殼を瑇瑁の代とす朝鮮鼈甲といふ○蠣龜

うをごる 俗

鳥名うぐるふ
同〜

うをがらせ俗
介名淡菜ハ同ジ○又魚名安藝ヨリ烏頰魚ヲ云○又魚名大坂の俗あぶらたのそのふ

うをぎす攝津俗
魚名黄頰魚の一種海産の者あり形河産ハ同ジクシテ只白黑の竪條あるを異
しるせ長三寸より五寸ハ至る

うをぐちなめ俗
魚名海蛇ハ同ジ○又魚名形海鰻鱺ハ似て圓長背ハ淡灰腹ハ淡紅尾尖りて尾
鰭あく口濶く鋭歯あり腮骨甚濶大ヨリて紅色あり又とうじうを
へびの名あり○又魚名伊豆の俗ハ鱆魚をいふ

うをごめ俗
草名蒔草ハ
同ジ

うをさうめん俗
海藻名形索麪の如く細長ヨリて深緑色
塩ハ漬又灰ハ和シ乾シ貯て食用ヨリ

うをざめ俗
魚名犁頭鮫ハ
あるべし

うをざら俗
虫名あめふらしハ
同ジ

うをざみ俗
介名蜆の一種海中ハ産ヨリる者ハ大
きくハ經二寸許外面黑褐或黄褐色あり

うをたまうど能登俗
石名薑石ハ
同ジ

うをちる
膿汁をいふ和膿瘡汁也字美之留又子相迎上

うをちるた俗
虫うをちるをたたてむしめき
植虫石帆の類ヨリて葉繁く杉葉ハ
似て細小淺黑褐色あり

うをちるでき
魚名海産の鱸をいふ大草家料理書海
鱸ハ汁ハよろしく上也さしみ中あり

うをちるめ俗
魚名海牛ハ同ジ○又魚名阿波の俗
かそとふくをいふ

うをちるひめ俗
小扁圓なる石ハシて稀ハ船来あり此石
を以て膿を吸ヒ〻む是即ち小豆島の産
龍骨と呼ふものと同質
あるいとめふ吸毒石

うをたけ
介名九州邊の泥海ハ産ヨリ其殼蚌ハ似て
圓く質脆シ常ハ泥中ハ在て肉を上ハ出
ヨリ肉長きハ一尺許色黑くシて内空く形筍の如シ腸を去り食用ヨリ
又醃藏シて遠ハ致ヨリ○泥筍料理物語海菜ハあへ物さしみ

うをたまご俗
魚名形ののづハ似て扁濶長五寸許其色
黑く或ハ黑色ハ赤ヨリ帯ふ此魚胎生ハ

〜と尋常のたまごの卵生
あるを異あり○海鄙

うをたびら俗
魚名あるくだひを
あるべし

うをぢ
陸路を對へとのふ 万四 いさゝをとり
海路を出て

うをてふ〜 伊豫松山俗
魚名、緋魚を
同〜

うをどうぐめ俗
蟹屬、黨魚を
あるべし

うをどちやう俗
魚名、ぎんやうを
同〜

うをどんぐるん 讃岐高松俗
蟹屬、黨魚を
同〜

うをどり俗
うをやづたを同じ
○又藪螺をとのふ

うをのあまこを
えびをとのふ 能宣集 世の人は海の翁とのふ
めもとゝまぐとたちゆるたらをとありける

うをのこ
生の子まて子孫をとのふ 敏達紀 子々孫々
古語云生児八十綿連々 續紀廿三 生子乃八十都岐自

うをゆる俗
介名海産の蝸蠃あり形色淡水産の
如くまて其尾禿せをを

うをばうをを 筑前俗
亀類蠎亀を
あるべし

うをひば俗
植虫名珊瑚の類あり海底石上を生を大
〜附着して網の如〜其色紅黄紫白青黒褐の數品あり外柔まして
骨あり紅黄の二種の者外皮を去もび骨珊瑚の如〜○石帆

うをやづき俗
藪螺の卵ありとのふ大さ寸を充たを扁
荷包の如〜畳り連て海石を着〜是を採り其一面を一小孔を穿ち
圓まして黄白色皮硬く内を液あり其形
紅色を染め翫具ともを児女ともを含を鳴をこと酸醤の如くを

うをやづを俗
植虫名、やつををびを
あるべし

うをまつ
海松を同じ〜 土佐 おぶのつををけあい子の日ろ
あをまるべらををろををを引べうりけり
○又俗を植虫名石帆の類まして枝少く扁まるを
〜と黒澤あり枝上希を葉あり○黒珊瑚

うをみやうどん俗 うをみやうづ〜 三河俗 并虫名、あめふらを
あるべし

うをやう俗　鳥名いんちやうに同じ

うをやうじ俗　虫名おめふしに同じ

うをやうのぎ俗　海藻名大葉藻に同じ○又植虫名海邊沙中に棲み常に沙上に出つ其形箸の如まつて長く内蚯蚓の如く末濶して微く曲る本に章魚の疣の如きものあり骨は箸の如く全圓なるあり四稜なるあり○越王餘筭

うむ マミムメ　事物の久しき又多きに堪へずして厭くに思ふをいふ○倦万十二　そこなはらぶうをのたくうちもたけ續時すゑこゑにあきそたのもりたる君にあもゝ○又麻苧をつゞ合せるをいふ○績万十四　あきをゝをとをけにふきさゝ宇麻受とも　せそこゝに○又果實の熟せるをいふ敬木四　瓜ふゝいうゝそこゝにもゝ　たるあゝふゝれてゝるゝゝ膿をもつをもいふ熟の轉なり

うむ マミムメ　子を誕生せるをいふ記上爲生成國土奈何　枕二　はうせのおもゝ　うゝはせもゝる

うんり丹後俗　虫名大さ半分許身黑く翅白く首に絮あり群飛て上下に卷つく狀の如し

或は旋り飛て礙と礙ず如し○浮塵子

うむつた　うゝゝ月に同じ神功紀適當皇后之開胞

うむうしき シク シ シキ　むゝ同じ　續紀十其人乃宇武仰志伎事

うむぎ　古蛤類の總名なり記上乃遣請貝比賣與蛤貝比賣令作活景行紀以蒲爲手繦白蛤爲鮮屬鱉魚に　むゝ

うんきう 筑前俗

うむきさの　草名宿根より生ず一根數莖高尺許細く硬く莖毎に三枝枝毎に三葉着く葉卵形細鋸齒あり莖上に數花を連ねて倒に垂る花四瓣々内長蕋を出す先勾りて碇に似たり色淡黃紫白等あり本和滿半藿和名字名也末止利久佐

うんげん音　名しるしより續紀六右京人支半于刀河内國志紀郡人刀母離余叡色奈並染暈繝色而獻之大神宮式小暈繝錦廣二以字暈繝ウンケン　古ゆい種々の色を開じつて染むるをいふ中古ゆい數色の條を別て織出せる錦の

うんざうばい 筑前 俗

虫名飛蟻ゝ

うんぜる セジスズルスル

ある女のあるゝふあるゝと世の中を思ひうんどゝ
思ひもあるゝふつけとうむ〜給へるとのそれ給へんこと
とを〜ものへり 竹 うんどゝとゝあるゝぬ 伊 あて
源夕霧 さやうの事の

うんぜんつゝ 肥前 俗

躑躅の一種葉細〜 振袖の如く花る小ゝ
〜と濃紫あるとゝふ又淡紅淡紫白色等

あり其枝も頗る細小あり其初肥前
雲仙ゝたけより出とゝふ

うんどうぎめく 音

小豆粥ゝ同ド 下學 紅調粥
紅月十五日 豆粥也

うんどん 音

食類、うどんゝ同ド
下學 餛飩

うんね 俗

介名つべたゝひゝ
同ド

うむる メムルムル

うぐもるゝ同ド 宇拾十三 家の北のまちと
此あけとのぬ〜のうめとつゝける家あり

以字 填 ウムム 滿也 ○又俗ゝ熱湯中ゝ水を
和〜温ゝ〜用ゐるとゝふ

うめ

あり又尖瓣の者あり花色も朱
三百餘種ゝ至る花後實を結ぶ圓ゝ〜と酸〜 万五 もつともとゝるの宋
たゝぶゝ〜こそ烏梅と折つゝたゝ〜きをへめ 醫心三十 梅實云々和名○又
重の色目ゝ〜ふ 雅裝 梅ゝるとゝ白くゝゝるこゝとゝほう 物裝 梅
狩衣面白裏
蘇枋

果木名其樹及葉杏ゝ似て瘠せ早春白花
と開く五瓣ゝ〜て圓瓣あり又六瓣の者
紅粉紅白質紅黄色等の異あり種類
結ぶ圓ゝ〜と酸〜

うめうつぎ 俗

灌木名揚櫨の一種短葉ゝ〜て
花梅花の如き者とゝふ

うめがき 孫

ゝるもゝるゝあり 挑薑 梅ゝるとゝ
こゝたゝるとゝるゝ紅梅

重の色目あり 梅と單稱もる者とゝ異あり
雅裝 うめゝき孫ゝゝ紅梅ゝるもゝるゝ
ひゝるゝて

うめく カキクケ

たゝぶ誦〜とうめゝて 源 帚木 うめ
抗口 人ゝる語ゝうたゝへるとせんとゝ

うとゝ息つゝゝゝう出て大息もるとゝふ轉ド
とゝカを用ゐて聲を出もゝるゝふ 大鏡二 ゝゝ
うめゝたゝるけ〜きもゝつ〜けゝのもゝ
とうめきぞ〜たる歌も

うめぜ 俗

紫蘇葉ゝ梅實を和〜塩ゝ漬て
絞り出〜たる汁とゝふ

うめぞめ

梅樹皮にて染たるものゝ[宗五大草紙]たゞ男い若きも老たるも白きうゑび〳〵其外い梅染にとよく〳〵候

重の色目あり[雅裝下]あるもてゝをゝ白〳〵うらゝをゝ紅ゝをゝもゝ〇紅

うめづけ

梅漿にて漬らる菜蔬をいふ[殿中申次記]梅漬二桶[庖丁聞書]精進の時い梅漬

うめびしお俗

白梅の肉を打たゝき醤の如〳〵たるをいふ

うめぶし

梅實を塩に漬け日に晒し貯ふるをいふ又紫蘇葉を加へ漬らるあり[世俗立要集]

梅干い僧家の肴あり[精進魚類物語]名をゞ梅法師とも申ける云々

うめるどき俗

木名高き丈許技纖細葉形梅の如〳〵して光あ〳〵枝間に攢りて互生も五瓣の小淡紅花を開き圓實を結び紅熟も又黄實白實の異あり〇落霜紅

うも

芋に同ト[万十六]蓮葉いかゝとそあれるもあきまろゝ家なる物い宇毛の葉にあ〳〵心に思ふ事をとるけやゝぬきゆるをいふ[源須磨]あゝぬ國のこゝろ〳〵をいとうもも

うもれぎ

河原の埋木のあゝそらるまゝ〳〵もゝ事とあゝあゝれぬゝ下ふるゝ〳〵ど名取川戀しき瀬あらあゝそれぬゝ[元良親王集]埋も木の

うゝもるに同ト[天武紀下]土左國田苑五十餘万頃沒爲海

うもる

恭又敬ちゝまうて禮をいふ[景行紀]蝦夷等晝夜喧嘩出入無禮

うや

敬ふ狀をいふ[續紀廿四]宇夜宇也々相從事波無旦

うやまふ

慎て尊ぶをいふ[欽明紀]且夫信敬天皇爲立任那佛足石歌さてのみあとのそふうヒ

うやまためぐり宇夜麻比まつり

よゝとゝん此世いとゝん以字敬

うよめ尾張俗

鳥名鶺鴒に

うら

外又表に對へて裡の方をいふ[和裏宇良]内也[後拾雜三]ひゝでかゝ花の袂をもゝ久て

うらなえる玉を忘まぎうけん○又心をいふ内心の意あり うらぶ〜ちら〜こぶ〜あと情ふ冠ら〜をいふ即心悲〜心淋〜あり 記上 以爲心恥 万十七
そこと〜も宇良こひ〜そこと 古今哀 君まさでは烟たえまし〜 あらぐやの
うらさびし〜くもこえさらうあ 後拾秋上 あきぎりも〜玉ゆく萱のうら風の
うらかる〜こる秋い来ふけり○又心の中をいふ前條の意まそ稍異あり
後撰 恋三 こちうつことたのめ〜事ももあせぬ也我ぞうき身のうらうらむる
又流もてい行方もあ〜 涙川我身のうらやぶりあるる〜ん○又心の中ト
つゝむ車をいふ 伊 そろ草のあ〜ら〜れるようにうらあ〜を見ゆる○又隠を
けるうあ 枕十三 さるいよ〜〜〜あらたる事あらはれぬ往さ行の車をとるをいふ占ふ同じ 万十一 ゆふけまも
占ふものれるこうひ〜ふきゆ〜ふ あり〜我ふうれ〜○又海川の曲うて入こあり
ふのう〜んとふき〜ふ 和 浦 物名 万二 石見の海角の浦ゆを浦ゆ〜と入こそ〜め○又
處をいふ 物の末の方をいふうらもつ轉あり 万十四 ゆ〜〜ふ也ひ〜やものゆる山の
宇良賀禮せゆ〜こと
そふ〜もかも

うらうち

家のひたゝまいうらうちたるをいふ俗あい紙革
公家いひ〜ひ〜ひ〜まあり 等の物ふ元とたりてをいふ 奉公覺悟記 武
衣服のうらを着たるをいふ俗あい紙革

うらうつゞひ

白處々黒斑あり底細紋あり 介名螺類あり大さ一寸許形こ〜たるがひ
立さ〜ひく葦の本葉をうゆこ ふ似て上尖り下平あり外麁糙ゆ〜て青
うらうこをうらうつゞひをひろひつゆ〜ゆ 旋轉せ故ふ又裏渦ゆひとも稱せ 夫廿七
うらうこを重稱て云へるゆりうらうの下併せ
見るゆ〜 万十九 宇良宇良ふてゆる春日ふ

うらう〜

ひたうりあうりこうろうあ〜も
土佐 舟出〜てゆくうら〜ととりてこうゆく
草名、翻白草ふ
同ト

うらうぜゞき 俗

ト〜ふ出たる兆をいふ 敏達紀 大臣
即遣子弟奏其占狀
漫ふ心ゆ〜ろ〜浮立つをいふ 記中 於
是天皇宇羅宜是所獻之大御酒而

うらうた

うらうゞる

うらゞろ 俗

草名ゆあうふ同じ○又草名、委陵菜を云
○又草名、美作の俗天名精をいふ○又草
名播磨の俗博落廻をいふ○又魚名、若狭の俗もゞまをいふ

うらぎろぎ〜 俗

草名、東風菜ふ同じ○又草名のこと
ぎ〜ともいふ

うらぎろのき 俗

木名諸國山中に生ず葉櫟に似て鋸齒稍粗し背に白毛芽あり五月葉間に小白花攢り開く實形櫻實の如し紅熟して味甘酸ちり

うらて

原相撲より出て歌合などの最初の番をいふ 寛平菊合左方占手の菊い殿上童に立君を女おつらして 女郎花合 あゝうの土の下あて秋ぎちてけふのうらてわあふをとゝのへ

うらあ

裏あき草履の名あり 禁秘抄 今不取侍 臣脱沓裏无 五代帝王物語中門の廊に車よせて手づゝうらあゝと取出つ 調度歌合 梶をたゝえをを きれぬとあゝせをや舟さゝよをるうらあゝわゝて

うらあひ

うらあゝの體言あてトをる筮をるのふ 宇拾 其月日易のうゝあひをる男来りて やゝどゝうんをるとゝ考へゝ

うらあふ ハヒフヘ

未来の事見ぬ所の事を知らんがためにト筮の事を行ふをいふ 神代紀 基業成否當以汝爲占 万十二 玉ぢとの道ゆ紀うらふ占相いるゆあをんとゝうれゆのうゝる

うらのうを

うらのつゝき

うらをひ

うらひる ルルルルレ

あゝうゝん 壬二中 あゝぬとをうらたあをゝの衣の袖に秋風ぞふゝ うらひれゝへる

うらふ ハヒフヘ

君をあつひをとをゝ紀うらせどゝる

うらふる ヘフルフレ

うらふゝ同ト 履中紀 伊弉諾神託祝曰不堪血鳧矣因以卜之 万十三 あゝあゝ相有

うらふる ルルルルレ

しゝのゝ方十一 山ちきの白露あををうらをふゝとゝうぢゝ入やまを

うらふゝ同ト 安康紀 天皇異之卜其所由 繼體紀 占擇良日 万五 ひとゝる稱の宇良夫澄をるゆたゝゝ山ゆまちゝうぢゝをゝ浦經

陰陽寮の長官あり 職員令 陰陽寮頭一人掌天文曆數風雲氣色有異密封奏聞事 陰陽寮をゝふ中務省の被管あり

うらうゆ同ト 履中紀 兆云惡飼部等黥之氣

事に因て心の憂ひ悲む意あり 古今 秋上 秋萩ふうらひををれば足引の山ゝとゝとゝを鹿のうらひれゝへる

うらうふ同ト 履中紀 伊弉諾神託祝曰不堪血鳧矣因以卜之 万十三 あゝあゝ相有

うらべ　ト部直氏ト之

廳座[江次十八]神祇官ト部廿人[宮内式]率宮主ト部等先就宮内ト部の事を掌る人をの〳〵職員令神祇官云々

うらぶ〳〵　筑前俗

草名山崖又岩石に着て生ず茎細〳〵て堅〳〵葉濶さ四五分長さ二三寸面深緑背色淡く〳〵て金星列ある冬を經て枯ぬ又葉三又に分れたるあり大葉の者あり○金星草

うらぶん　うら梵ぶん音

于蘭は漢に倒懸と譯す百味の飲食を盆に盛て佛に供養すれば倒に掛られたる苦患を免るとのふ意なり七月十五日行ふ佛事をのふ盂蘭盆經に詳なり

[續紀十二]天平五年秋七月庚午始令大膳職備盂蘭盆供養[公事根源]盂蘭盆十四日内藏寮御盆供をそなふ[七十番職人歌合]心太賣、うらぶんの半ばの秋のよもすがら月かたぶくまでも我心かな

うらふきうのこうばい　こうばの音

重の色目あり[女官飾抄]うらふきうのこうばい表紅梅裏紅

うらを

[六帖四]うらをと千載壹五朝夕ふるうめをとりつゝ[拾遺]只うらをうらをを早くよりそけ[推古紀]有感必悲同あはたゆもうらをに絶ぬものとこそきけ

よりとさうめ〳〵あれば○又うらをと同じ〳〵浦のめをとりとのふ万四[万四]うめづゆ

浦箕とをたをて[又九]ゆ〳〵のさたをあらひふけ〳〵白神の磯の浦箕をまくてこそきこと[illegible]

うらむる　心に心あらぬ所あらて心を苦しめ歎き又人をうらみどうりいかるをとのふ怨又恨の意

[欽明紀]新羅怨曠積年[宇藤原君]うらむるもどうげくうるどゆもるぬちうゆふきまたたるの峯とあるうん[源夕]六條さうるうらうらうらを思ひぐれ給ふらんうらみらるんもうらむ〳〵

うらめしき　シクシキ

うらむの形狀言あり[和泉式部集下]雨りうふりうらめしきことゆありけむ[万五]宇良賣斯企いもがみこころのあれをたゆつゝふせとおもふ

うらやましき　シクシキ

羨の形狀言あり[伊]いとゞしくさえ行うの戀しきにふうらやましくるかへるあを[落窪四]ここゝども是を少〳〵さえて羨しと思ふべし〳〵ぞ

うらふのふき

重の色目あり[道裝]裏紫冬表黄裏紅[物裝]裏山吹狩衣面黄裏萌黄

うらふむ　ウミムメ

心病〳〵きまり出て願ふ〳〵く思ふをとのふ[推古紀]群臣百寮無有嫉妬[宇姝妬宇良也午]

うらら

のどやかなるをいふうららかにいふもうららを重詞にくるなり 源初蝶 春の日のうららかにてうらうらとかすみたる 堀川院百首 春の日のうらうらとかすみたる

うらうら

のどやかなる狀をいふ 源須磨 うらうら若木のさくらのうるはしきをめて空のけしきはうらうらへだてず

うらうらける 仄平平

うらうらとある狀をいふ 源初音 年立てうらうらとあるたのそらのけしきなどうらうらける

うらうらけさ

まい

うらうら

秋の夜の月 續千冬 難波づ〻名夕浪たち〻風立て

うらうらとる 仄平平

草木の末若きまうで出て人の弱きをいふ 万十 そ孫うつ〻今はるいもが浦若みな

うらうらとつけ

ひるまで

うう

まのこまたりを見てうう作りけん人のうき孫を

○又草名下野日光の俗ゐ玉簪をいふ

うういい 常陸水戸俗

うういとも 近江俗

うう孫 紀伊大和俗

ううばへ

ううまん 音

うる 平仄平仄

まぞへける 拾遺意三 ある名のみたりの心

いきまうる人をうるよりもまうる

うる 仄平仄平

價をとりて入る物をあたふるをいふ

古今雜下 家をうりてよめる 大和 監の命婦

瓜類の總名あり 仁賢紀 取瓜將喫 内膳式 供奉雜菜熟菰八顆八肚 兼盛集 山城のこ

堤ふありける家を
人ふうりて

うるまい 俗
穀類、あるものうる〜稼ふ
あるべ〜

うるまいさう 俗
草名、玉簪ふ
あるべ〜

うるとの
溪鹽の鰤を塩藏ふしたる物あり 拾遺物名
うるるかり、この家いうるかりそも見て〜

うるとの
うるあるべ〜あるべ〜るるまんこそ思ふ 七十番職人歌合 ろ〜〜あも
ろうとうるるとやまてべ月の價いあ〜〜あり ぬべ〜〜

うるき
草名、うるひふ同じ 和 夏枯草 流和名宇 ○又
土茯苓をいふ 大同類聚残篇 宇流木 土茯

苓〇按ずるふ菝葜を
云へるあるべ〜

うるきび 俗
穀名、黍の實粘らざる者をいふ
形狀黍の下併見べ〜 〇稷

うるきび クシキ
うるせるふ同じ 源帚木 たるべこの手ふも
あるるまべ〜〜そのうたるべ〜とうるきび〜
あるもひとりて侍つ〜 今昔廿八 返
あん侍〜 枕十 たべごとゆいうるきび
入と妻ふ和御許いうるきび兵の妻〜〜を思ひつるふ〇又煩〜厭べ〜きを

うるきびのふ 源須磨 かきつけんとうるきび 伊むさ〜あふきるたぐふかけて
たのむゆいとたぬもつ〜〜〜こふもうるる〜

うるる〜
漆樹の皮ふ鍬痕を入を流出をを取扱るる
脂あり 和 漆字流之 木汁可以塗物也

うるる〜い 俗
深黑色光澤あり〜漆の如き石あり北地ふ
多〜其形大抵圓〜〜鈍角あり〇烏石

うるる〜あぶを
漆ふあやうり〜瘡を生ぜるを
いふ 和 漆瘡 和名字流之加不禮

うるる〜きび 俗
穀類、稷ふ
あるべ〜

うるる〜けい 俗
草名、蠲羊泉ふ
あるべ〜

うるる〜ぬり
漆ふて塗るとのふ 天武紀下 男女始結髮仍
着漆紗冠 和 漆炙肉 和名字流之 夜岐之 留乃 奴利乃 奉

うるる〜孫
穀名、日常食用の飯ふ造る稲あり
早中晩の別あり 本 和 粳米 和名字流之 留之 禄

うるる〜のき
木名、葉一柄ふ指圓あり葉三四對を排生を
夏月枝梢ふ長穗を出し〜黃白の小花を
開き後實を結ぶ此實を煮て蠟を製〜又脂を取て諸物を塗る 夫廿九
られるものの身ふ似ぬうる〜のきぬるとまらるるふ何うるるらん

漆ぬて塗たる物を入まて乾くを處をいふ
又箱をいふ 以字 漆 音ウルシ

うるせた 仄 汎 切

麗きよう出て善良をも巧あるをもいふ
宇 [illegible] あるじ のゝ ゝ ぶ仁壽殿いうるせた
人ゝこそあれ 源 若菜下 宮の御琴の緒いうるせ〳〵 問たせ給ふ
古事談 春宮ゝ被奉問げるゝゝ

うるはし

うるはしき 汎 汎 切

うるはしきの體言あり 万十二 月こそれば國
と同じ〳〵ぞ山へあり 愛妹 へのう たるゝ
形の麗きよう出て愛又親〳〵しきをいふ
記 中 夜麻登之 宇 流波斯 神代紀 下 與味耶
高彦根神友善 万十五 宇 流波之 ゝあるゝゝふのもをゝもひつゝゆけぞう
もゝあきあ〳〵ゝん 源 帚木 あゝゝうるはしき御ありさまのとけ
がゝしもぐゝ げゝふあもひ
まぐゝうたもゝるを

うるひ

うるふの體言色のつやゝこのあるをいふ 新六 十
池水ゝまぐ花さけるゝきうぐて廣きうる
ひの春をあるゝし○又閏月をいふ 六帖二 うるひさへありてゆくべき年さ
ゝふる春ゝふゝ〳〵せあゝふゝ〳〵もゝゝ○又草名ゝふ高さ三四寸葉旋覆ゝ
似て鋸歯あり對生せ莖葉ゝ白毛多〳〵三四月莖頭穗をゝて五瓣の小
花を開く白色ゝて紫を帶又紫碧の者白花の者あり花後子を結び

て根拈る後奮根復生せ
本草 夏枯草 和名宇比

うるふ 汎 汎 汎 汎

雨露又い水あどゝゝめれ潤ふをいふ 千載 釈教
大空の雨ゝ〳〵ゝてもそゝ稀どうるふ草木ゝ
あのがさゝゝぐ 蜻中 ゝ〳〵てゝぐめ
ゝぐゝうたもぐゝもゝゝたぐゝ〳〵ゝん〳〵ゝえぐぞうるふ

うるふづた

三年毎ゝ一月を立て〳〵日月の運行をあて
もゝる月をいふ○閏月 蜻中 〳〵ゝごゝふあま
まるゝひゝ君ぐゝあうるふ月と
ゝくゝるゝゝあゝゝん

うるゝゝた 汎 汎 汎 汎

雨露又い水あどゝゝの物とぬしうるゝゝたをいふ
宇 滬 俳 獺 字拾十三 喉うるゝゝきん爲と心え
たまぐ 風雅 釈教 ゝゝぐ のゝゝき木の種と
思ひ〳〵とうるゝゝた雨ゝ一つゝりけり

うるゝゝひ

うるゝゝふの體言 散木 中 植ゝき〳〵心の蓮
ひゝけゝん願ふ涙をうるゝゝひゝ〳〵と
うるゝふゝ同じ〳〵 拾五七 のゝゝふゝ千歲の秋の
初露ゝうるゝゝひゝ〳〵ゝん君ぐ代のたゝ
新拾 釈教 法の水絶せいどう草ゝ木も
うるゝゝふゝどゝの ゝ〳〵ゝ〳〵ゝん

うるむ　マミル　ミル

打撲たる痕の色變りたるをいふ　四　疾

鮪流　○又色の鮮あざやかなるをいふ

うるあらさき　俗

魚名鱸の一種圓身にして眼眶赤くうるみたるやうに脂少しと味淡し

うるうこ

細魚の名あり　和　細魚　野留　古　○越前足羽川小産なるいさゞを今もうるうこと稱す

的實を詳ふせるものしの人ども蓋古名の殘まるあるべし

足羽川の産いさゞの下併見べし

うれ

秋あり草木の梢をいふ　万八　秋の野のもみぢあゞ末をうれ〳〵あへてこゝらうるはしく

あへる君うも　土佐　見渡せば松のうれごとに

もむ鶴い千とせどちとぞ思ふべし〳〵あり

うれ〳〵き　別　別　別

喜たゝきをいふ　万十九　あたら〳〵九年の間

めかおもふどちいむまでをもとが宇禮之久

あらそ　字　新撰禮　佛足石歌　さられ

まゝあれ見けむ人のともしき宇禮志久もあるを

うれ〳〵けた　別　別　別

うれ〳〵き意同じ　万十八　こゝをもあやふ

たふとみ宇禮之家久のよゝおもひて

うれたき　別　別　別

うれたゝきをいふ　記上　宇禮多久母那

久那留登理加　宇忠元　こまいちうげの大臣の

とひふこそあめれうもたた紀人うも　神樂譜　蟋蟀　もうゞ〳〵ちの

稱たき宇禮太左ゝのふかまるゝ

憂ひあげとゝを云　古今　俳諧　足引の山田の

そわつおのもき人我をうゝといふうもそ

うれそ〳〵き　別　別　別

〳〵きこと　後撰　意三　いとそるゝこゝ

いつ〳〵ゝとあさち川をもたのむへ〳〵

うれひ

うれひをいふの體言　濱松　二　いとゝうれひを

やちめ思ひとのゝる事を思へ

うれふ　ハ　ヒ　フ　ヘ

歎き思ふをいふ　記上　困　此泣患者　三實十三

是有何崇乎天所致乃災　奈良本止　左右介憂　禮比

念保之御坐須　○此語近世中二段の滋

ゝる語つまゝきかあそ紀うも

といへども自他の別をよく

考へて惑ふべし〳〵もゝ

うれふる　ヘ　フ　ル　フ　レ

歎き思ふ事を他に告訴ふるをいふ　六帖　四

へて為〳〵せて〳〵ゝ　源　桐壺　そ

うた戀い苦しき物とそゝるの神ふうも

枕　十二　ゝらいめをとゝゝらひつる

誰ふういち出へ候そん

うれへ

うれへるの體言　宇　祭使　身のうれへある

時あわやけ私ふうもへをの〳〵

うろ

空虚なる處をいふ

うろこ

うろこ海中に入れけり其跡を見るに大なるうろこを三
あとをもう○又俗に魚名にもうろこをいふ

うろこ(俗)

魚名だがもをもふ
もうすべ

うゐ(音)

有爲の音なれど佛家の語なり三界輪廻の
境界をいふ新勅釈教法性のむろどをいへど
よをぬ日いなり

うゐきやう(音)

草名齣香に同じ○又樹實名
大齣香をいふ
製藥名透頂香をいふ製藥する人の名外郎
の音なり○又俗にうゐらうをいふ

有漏の音世間の凡人をいふ佛家の語なり
新勅釈教有漏の身は草葉にをる露なるを
けん○又俗

いろろぐに同じ夫男山秋のけふとも契り
けん河瀬にもとなつよものうろぐ
鱗に同じ太平さ〜ものつ〜うりつる
女房忽ふふ〜たけ廿丈ばかりの大蛇と
跡を見るに大なるうろこを三

うゐらう(俗)

穀名稲豆に
かなべ

うゐらうまめ(俗)

藥のうゐらうに似たるようにふ米粉を黄
に染め沙糖を加へ蒸て方切にしたる餅なり

うゐらうもち(俗)

飢るの體言なり

うゐ

飢饉之媒神代紀下

うゐ

植るの體言なるたる物に冠らしてをいふ
宇惠木のこゑをあらたまるつの下道せのわ〜と○又植ゑる人
つの下道せのわ〜と方二打ものび〜春とるまるくちぶひもの
入て植人あと雇ひ具〜と又十三春されば殖樹のうへの遠つ人ま
うゑめしとも誰をこひぢふりたる加茂保憲女集今昔廿六其苗を船に引
うゑたるまるあ〜ん

うゑもんぶ(音)

右衛門府の音なり然もとも中古より發
聲のうをを去りてゑもんと唱ふ禁門警衛の
官府なり後紀廿二弘仁二年改左右衛士府
爲左右衛門府

うを

魚類の總名なり記上故諸魚白
和魚和名抄云伊遠

うをたろ(俗)

鳥名雎鳩に
なるべし

うをのめ俗

病名、手足ゟ白き小圓粒を生ずるもの〻ふ

うをばち大隅俗

虫名、蠮螉の一種にて三分許の蜂なり形大黄蜂ゟ似て狹小なり屋柱或ハ器物の蛀孔ゟ入て巣を作るものなり

語彙巻十二

定價金二十九錢

中議生 木村正辭
横山由清 總裁

岡本保孝
榊原芳野
黑河真頼 共撰
塙忠韶

物産諸品校正 伊藤清民
田中芳男